

日高堯子歌集
『空目の秋』

(ながらみ書房)

七十代に入った作者が身近な人々の死に耐えつつ生命への慈しみを深めてゆく。自然界の光や音や匂いを自らの魂と共に鳴させ、それらの色彩を白い絵の具で淡くほかすように幻想的に象徴的に表現する。

歳月はああこんなにも樹を繁らせて万の木洩れ日降りこぼしくる

ひゆつびいと鳥鳴き風がなまめけば千古の春がわれにめざめる

なめらかな対句やゆったりしたりフレインの歌が多く心地よい静かな調べを奏でる。

冬の陽のあかるき障子すぎてゆくさらさらと光さらさらと影

「わたしはいつ死ぬのかしら」ときく母に「あしたよ」といふ あしたは光

光と影（あるいは生と死）を対立ではなく同質のものと感じさせる歌には、死を怖れる心を超越し自然に身を委ねたいという願いがこめられているように思う。

しろいごはんの中になりますは阿弥陀さまほほゑみながら母食べをり

暮らしの中に宿るささやかだが尊いいのちの姿に気づかされる。(山下 佐保)

北神照美歌集
『ひかる水』

(短歌研究社)

海原からひとつ気泡が立つやうに欠伸するなり生まれて十日

赤子の欠伸に命の源の海を思う。発想を大きく飛躍させた歌が印象的な第四歌集。

かつて標野の紫草に射しし日は調剤秤をあかねに染めをり

これも、遙か万葉の時代へイメージを通わせ、色彩の美しい情景を重層的に描く。門に立つ石の仁王は早春の梅の香をかぐ顔をしてをり

勇猛、威嚇の相の仁王像を柔らかい感性で捉えて独特。他に、高安国世の回想やデモの思い出、友人の逝去等が詠まれ、作者の自叙伝的な厚みも感じられる一冊。

酒屋にはあまたの小さき水面がひそかに光る弥生の日差しに

いちまいのひかりが長く伸びてをり

東京湾ね。耳元に声

掉尾に近い一連「ひかる水」から。酒屋に並ぶ酒瓶一本一本に封じ込められた水面と、高層の窓から眺める東京湾の水面。暮

らしの中の光を再発見した心躍りに、明るい読後感が広がる。(伊沢 玲)

宇都宮敦歌集
『ピクニック』

(現代短歌社)

その恋の歌に『小さな恋のメロデー』を思った。すこぶるすこやかであり、君を見つめるまなざしは、ピュアで微笑ましい。ひさびさに晴れの週末 くるつてはい

ない僕は芝生をめざす

君のかばんはいつでも無意味にちいさすぎ たまにでかすぎ どきどきさせる

覚える 水ようかんよりすずしげな君のドロー・フォー返し返しを

句割れ句跨りや初句字余りが多く、独自のリズムを生みだしている。君以外に「女の子」が時々登場するのも特徴。

長ぐつをはいた女の子が誰にするでもなくバレリーナのおじぎ

数度コインを拒まれたあと手に入れた暴力的に甘いコーヒー

読みさしのページに挟むのはしおりならばこの世のすべてにしおり

二〇〇〇年、柗野浩一に出会い作歌を開始したというから歌歴は二十年弱。「少年ジャンプ」サイズで全面イエローの表紙も目をひく。

(大西 淳子)